９　次の文章は、『讃岐典侍日記』の一節である。藤原長子（讃岐典侍）が仕える堀河天皇は、病のため重態に陥っており、多くの僧がを行って病の原因である物の怪を退散しようとしている。これを読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈九州大〉二〇二二年度出題

　かやうに、いみじき人たちあまたさぶらひて、われも劣らじと祈り参らせらるるけにや、御物の怪あらはれて、僧正、など、名のりののしる人、あらはれさせたまうて、「一年の行幸ののち、『また見参らせばや』と、①ゆかしく思ひ参らするに、その徳なければ、おどろかし参らするぞ」と言ふを聞かせたまひて、「いかにも、この二三年、例さまにおぼゆることのあらば〔　　ア　　〕、行幸もあらめ、近きほどだになし。この心地やみたらば〔　　イ　　〕は、年のうちにもあらめ」と仰せらるるほどより、苦しげにならせたまひにたり。

　例の御かたより人つかはしたり。「さる心などなき人と聞けば、せめて思ひやるかたのなければ、言ふなり。Ａこなたへただ今のぼり参りなむや。道などぞふたがりて、かたはらいたくおぼしめせど」と仰せられたれば、②いかでかは「参らじ」と申さむ、「うけたまはりぬ」と申したれば、「さらば、今のほどに」と仰せられたれば、参りぬ。

　離れぬ人なれば、宣旨をぞ会はせさせたまひて、御心地の有様問はせたまふ。「見参らするままに申さむも、『おびたたしく申しちらしけり』など、漏れ聞こえてあしきこともや」などおぼゆれば、さもえ申さず。また、わざと召して問はせたまふに、申さざらむもあしかりぬべければ、「Ｂただ、のぼりて見参らせたまへ。さは、いみじう苦しげに見えさせたまふ」と申せば、「さは、もしや通りよからむひまに」と申して、とく返しつかはしつ。

　参りて見れば、殿やなど、「院より、『戒受けさせたまふべきなり』と、Ｘ奏せさせたまうけり」とて、召すべきさたせられ、その③御まうけどもせらるるほどなりけり。かやうののちならば、夜も明けぬべければ、「宮の御かたより召しつれば、参りたりつれば、かうかうこそ仰せられつれ」と申す。「道の所せきぞ」と弱げに仰せらるる、苦しげにＹおぼしめしたり。殿にも、「のぼりて見せ参らせばや」と申させたまひければ、「Ｃ今のほど宮のぼらせ参らせむ、もの騒がしからぬさきに」と思ふに、「のぼらせたまひぬれば。『御かたはらに人のなきがあしきぞ』とさたせられて、そのよしを申されけるなめり、帰り参らせたまひて、『ただばかりはさぶらへ』と仰せらるる」とて三位殿おはして、殿たち、みな障子の外に出でさせたまひぬ。

（注）　○隆僧正、頼豪……園城寺の隆明僧正、頼豪阿闍梨。

　　　　○例の御かた……堀河天皇の中宮である篤子の御方。

　　　　○さる心などなき人と聞けば……長子は堀河天皇の病状を報告する親切心などない人だと聞くので。

　　　　○離れぬ人……縁続きの人。中宮、長子、宣旨は何らかの縁者であったとされる。

　　　　○宣旨……中宮に仕える女房。

　　　　○殿や大臣殿など……関白殿や内大臣殿など。

　　　　○院……堀河天皇の父である白河院。

　　　　○戒受けさせたまふ……受戒（仏の定めた戒律を受ける儀式）のこと。

　　　　○賢暹法印……法性寺の座主で、堀河天皇の護持僧。

　　　　○さたせられて……関白殿が判断なさって。

　　　　○三位殿……内大臣源雅実の妻、師子。

問１　傍線部①～③を現代語訳せよ。

問２　空欄〔　　ア　　〕・〔　　イ　　〕に共通する助詞を補え。

問３　二重傍線部Ｘ・Ｙについて、敬語の種類を次の中から選び、番号で記せ。

（１）　尊敬語　　（２）　謙譲語　　（３）　丁寧語

◎問４　傍線部Ａで述べられている内容を、「こなた」が指す場所を明示して説明せよ。

問５　傍線部Ｂは、中宮に代わって堀河天皇の病状を尋ねてきた宣旨への返答だが、長子がこのように答えた理由について、文脈に即して簡潔に述べよ。

問６　傍線部Ｃについて、直前までの文章から「もの騒がし」の具体的な内容を示しつつ、現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝心待ちに思い申し上げる

　　　②＝どうして「参上するつもりはない」と申し上げるだろう、いや申し上げない

意志の意味で訳しても可。

　　　③＝いくつかのご準備をなさる

「いろいろとご準備なさる」などの訳も可。

問２　こそ

問３　Ｘ＝（２）　　Ｙ＝（１）

問４　Ａ堀河天皇のもとに大勢の人々がつめかけて道が混んでいる中で、Ｂあなたのことを気の毒に思うが、Ｃ自分のところへ今すぐ来て堀河天皇のご病状を報告してほしいと、Ｄ中宮が作者に命じている。

Ａ＝２

Ｂ＝２〔「あなた」「作者」「讃岐典侍」を中宮が気の毒に思うという内容で説明していること。〕

Ｃ＝３〔「作者（讃岐典侍）が中宮のところへ来る」という内容であること。〕

Ｄ＝３〔「篤子の御方」なども可。「中宮が作者（讃岐典侍）に命じている」という内容であること。〕

問５　Ａ自分が見たままに天皇の病状を言ったのでは、「讃岐典侍が天皇のことを大げさに言いふらした」と、ほかの人に漏れ聞こえて、不都合なこともありそうだと思ったし、Ｂ中宮が自分をわざわざ指名して呼び寄せているのだから、何も申し上げないのも悪いことに違いないから。

Ａ＝５〔同内容であれば可。〕

Ｂ＝５〔同内容であれば可。〕

問６　Ａ今のうちに、中宮を堀河天皇のもとに参上させて差し上げよう。Ｂ賢暹法印がやって来て受戒の儀式が始まってしまうと、夜が明けてしまうので、騒がしくならないうちに。

Ａ＝５〔「中宮を天皇のもとに参上させる」という内容がなければ０。〕

Ｂ＝５〔「受戒の儀式が始まると騒がしくなる」という内容がなければ０。〕

【現代語訳】

このように、たいそう高貴な人たちが数多く（天皇の）そば近くお仕えして、自分も（それに）劣るまいと祈り申し上げたためなのか、御物の怪が現れて、隆明僧正・頼豪阿闍梨など、声高に名乗る人が、（御物の怪の正体として）お出ましになって、「一年前の行幸の後、『またお目にかかりたい』と、問１①心待ちに思い申し上げるのに、その（行幸という）恩恵がないので、ご注意を促し申し上げるのだよ」というのを（天皇は）お聞きになって、「確かに、この二、三年、いつものように（体調が良く）思われることがあったなら、行幸もするであろうが、（最近は病がちであったので）近い所にさえも（行幸してい）ない。この病気がおさまったならば、今年のうちにも（行幸）しよう」と仰せになる頃から、苦しそうなご様子におなりになってしまった。

　中宮篤子の御方から使いをおしになった。「（長子は堀河天皇の病状を報告する）親切心などない人だと聞くので、どうしても（ほかに）思いあたる人がないので、言うのだ。自分のところへ今すぐ参上してくれないか。（大勢の人々がつめかけて）道が混んでいる中で（来てもらうのは）、（あなたのことを）気の毒に思うが」と仰せになったので、問１②どうして「参上するつもりはない」と申し上げるだろう、いや申し上げない、「承知しました」と申し上げたところ、「それでは、今のうちに」と仰せになったので、（中宮のもとに）参上した。

　縁続きの人なので、（中宮は）宣旨を（私に）お会わせになって、（天皇の）ご病状をお尋ねになる。「拝見するとおりに（天皇のご病状を）申し上げたのでは、『（讃岐典侍が天皇のことを）大げさに言いふらし申し上げた』などと、（ほかの人に）漏れ聞こえて不都合なこともありそうだ」などと思われるので、そのようにも申し上げることができない。また、（中宮が自分を）わざわざ（指名して）呼び寄せてご質問なさるのだから、（何も）申し上げないのも悪いことに違いないので、「直接、参上して拝見なさってください。それは、たいそう苦しそうなご様子にお見えになります」と申し上げると、（宣旨から中宮に）「それでは、もしもうまく通れそうな（ときがあればその）機会に（参上なさったらいかがでしょう）」と申し上げて、すぐに（私を）お帰しになった。

　（天皇のもとに）参上してみると、関白殿や内大臣殿などが、「白河院から、『受戒なさるべきだ』と、奏上なさった」と言って、（関白殿が）賢暹法印をお呼びになるよう判断なさって、その問１③いくつかのご準備をなさるところであった。このような（騒ぎの）後ならば、夜も明けてしまうに違いないので、（天皇に）「中宮の御方からお召しがあったので、参上したところ、このように仰せになった」と申し上げる。（天皇は）「道中が気詰まりなことだよ」と弱々しく仰せになる、（いかにも）苦しそうにお思いになっている。関白殿も、「（中宮を）参上させて（天皇に）会わせ申し上げたいものだ」と（天皇に）申し上げなさったので、「問６今のうちに中宮を参上させて差し上げよう、もの騒がしくならないうちに」と思っていると、「（中宮が）参上なさったので。（関白殿が）『（天皇の）おそばに人がいないのはよくないよ』と判断なさって、その旨を（中宮に）申し上げたようで、（関白殿が中宮のところから天皇のもとへ）帰り申し上げて（その次第を申し上げたところ）、『典侍だけはおそばに控えよ』と仰せになっている」と言って三位殿がおいでになって、関白殿たちは、みな障子の外にお出になった。